

社会的・政治的プロパガンダに利用される ナチス・ドイツのクリスマス（下）

—戦時のクリスマス—

桑原 ヒサ子

はじめに

本稿の前編「社会的・政治的プロパガンダに利用されるナチス・ドイツのクリスマス（上）」¹⁾では、ナチスの権力掌握から第二次世界大戦開戦までのクリスマス・プロパガンダに注目した。国家プロジェクトの一つである「冬期救援事業（WHW）」は、600万人の失業者で溢れていたナチ政権初期に、経済的苦境に陥った人々に対する公的福祉政策であると同時に、労働者階級を民族共同体に取り込む重要な意味をもった。この事業は毎年10月から3月までの半年間が当てられたが、その期間中クリスマスは最も重要な祝祭であった。クリスマスツリーを飾ることも、プレゼントももらえない貧困家庭がクリスマスを祝えるよう、アドヴェントの時期に大規模な募金・寄付の物品収集活動が展開され、「みんなのクリスマス」と称して地域ごとに組織的なクリスマス会が催された。こうした活動は、主にナチ女性団やドイツ女性事業団、ドイツ女子青年団や少女団によって支えられた。前編では、ナチ時代に発行部数第一位だった女性雑誌『女性展望』に掲載された活動報告に基づき、女性の視点から「冬期救援事業」と「みんなのクリスマス」の内容を再構成した。

この事業は、開戦後は「戦時冬期救援事業」と呼ばれた。開戦直前のドイツは、経済的に最も豊かな時期を迎えており、冬期救援事業の支援対象者は変化した。開戦後は何といても前線の兵士が第一の支援対象となる。第一次世界大戦時と同様に、戦場にあっても兵士たちが、故郷のクリスマスを迎えられよう銃後は力を尽し、銃後が一体となって前線を支えていることを示そうとした。本稿では、「戦時冬期救援事業」となって活動内容がどう変化したのか、そして『女性展望』が「戦時のクリスマス」というプロパガンダを使って女性たちをどう銃後活動につなぎとめようとしたのか、その内実を追っていく。

1. 戦時冬期救援事業の活動内容

(1) 主たる支援対象となる前線の兵士たち

戦争が始まると、戦争の緊張感が「戦時冬期救援事業」の在り方に影響を与えるようになる。

1939年11月第2号の表表紙裏には、戦時冬期救援事業開始を宣言するヒトラーの言

葉が掲載され、その言葉を受けた記事「銃後の戦い—戦時冬期救援事業」²⁾は、銃後が前線と一体となって戦う覚悟を表明している。戦時冬期救援事業の目的は、もはやこれまでの一人ひとりの慈善行為ではなく、それが寄付金であれ、行為による援助であれすべてがまとまって、国外にいる兵士たちへの感謝として前線に組み込まれ、一つの強固な共同体となることだった。

前線兵士が第一義的支援対象ではあったが、これまで通りナチ国民福祉団による高齢者や子どもたちに対する支援は続けられ、開戦により夫が戦場にいる母たちの支援を救援事業「母と子」は強化しなければならなかった。とりわけ、ポーランドに獲得した領土に戻った民族上のドイツ人に対して、大規模な援助が必要となった。

「2倍の寄付を！」が合言葉になったが、街頭の呼びかけが響くところでは、通行人は当然の義務として応え、寄付者の表情や態度が以前とは異なり、拒絶は稀で自発的だったと上記の記事は報告している。そもそも街頭募金にはヒトラー・ユージェントやドイツ女子青年団の団員が動員されてきた。ナチ指導部が若者の熱意を効果的に利用しようとする戦略だったが、開戦後の12月の2日間、全国で数百万の若者たちの必死の声が通行人を追いかける様子が伝わってくる。(図1)

ナチ政権初期の窮乏期に導入された、節約料理によって浮いた食材費を寄付する「煮込み鍋の日曜日」は、開戦後、ヒトラーの指示で「献身の日曜日」と言い換えられた。

「一人ひとりが自分でできることを、そして、一人ひとりが、ほかの人より一歩前へ！」をスローガンに、自発的行動として、裁縫部屋で数千人の女性たちが古着を新しい服にリサイクルしていること、駅での奉仕活動の準備が進められていること、ドイツ赤十字の看護師たちが自らの義務を果たしていること、そして家から家を回って寄付の品々を集めるボランティアの活動などが、開戦後の緊張のなかで始動した。

図1 街頭募金に使われた赤い募金箱。こうした写真を『女性展望』に掲載することで、積極的な寄付を促した。
(出典：『女性展望』1939年11月第2号、表表紙裏)



1939年12月第2号には、女子青年団員の働きを伝える記事が2つ続く。一つは「母が戦場の父に手紙を書く」³⁾で、書簡の形式をとって息子や娘たちが参加する子ども団や女子青年団の仕事の様子を伝えている。ペーターとアネリーゼは子ども団のなかで、家々を回って不要なおもちゃを集めては修理してプレゼントを作っているの、そうした仕事が家族のためのプレゼント作りにも生かされていること、年上のグレーテルは夕方から裁縫の集会所で古着から新しいものを作ることを学び、家でも、きつくて着られなくなった父親の上着からスカートを2枚と暖かい室内履きを作ることができるようになったと報告している。そして、子どもたちに触発されて、母親もお金をかけずにリフォームして素敵なクリスマス・プレゼントを作り出すつもりでいるという内容である。

この手紙は、もちろん戦場の夫宛てではなく、『女性展望』の読者を啓蒙するためのものである。子どもたちですら冬期救援事業のために前線の兵士やその家族、あるいは困っている同胞のために力を尽していることを描き、読者に対して共同体への更なる奉仕を促す意図があった。家庭内の儉約にも涙ぐましい努力が窺われる。開戦前年には誌上の記事や広告に贅沢で高価なプレゼント商品が並び、1939年12月第1号のファッションのページには、華やかなイブニングドレスも掲載されていた。しかし、家族の一員が戦場で戦っているというのに、食料切符や全国衣料切符制度が導入されたとはいえ、まだ余裕のある戦争初期に、安楽な生活を送るわけにもいかない。この書簡に記述されている、戦時経済を優先するために家庭の消費経済を犠牲にする心構えこそが模範とされた。

もう一方の記事「私たちは喜びを届けたい」⁴⁾でも、女子青年団員は前線の兵士たちに送るクリスマス小包作りに精を出している。編み上がったソックス、耳当て、手袋が山のように積み上がる。そればかりか、民族上のドイツ人の子どもたちに何十万という木製の人形が配布前の展示会に並べられている。そうした仕事以外にも、母親たちの午後の会や両親の夕べの会でクリスマス音楽を披露したり、メルヘン劇を演じたり、子どもたちの午後の会ではカスパー劇を見せて、クリスマス前に子どもたちを喜ばす催しを企画する。そして、12月には2日間、何百万人という少年少女たちが路上に出て、募金活動を行う。この記事を執筆したヒルデ・ムンスケは、少年少女たちが民族共同体に対する自らの義務を果たし、自宅でクリスマスを迎える時には、充実感に満たされて前線の父や兄弟を想い、総統にクリスマスの挨拶を送れるだろうと結んでいる。

(2) 私的「家族の祝祭」に対する公的「民族家族の祝祭」

翌年の1940年12月第2号の記事「民族家族の祝祭」⁵⁾は、もはや本来の「家族の祝祭」が実現しなくなった今、ドイツ民族全体を家族と見なす祝祭としてクリスマスを抑え直そうとしている。戦前の「みんなのクリスマス」が、貧困生活を送る同胞もクリスマスの喜

びを体験できるようにする冬期救援事業の一環だったのに対して、「民族家族の祝祭」という名称には、第一に、故国の家族と前線にいる家族との私的つながりよりも、むしろ戦時下で民族のために犠牲を払う兵士という集合体と、残された家族の銃後という集合体が、大きな家族である共同体を構成するという理解がある。第二に、諸外国から東部地域に戻ってきた民族上のドイツ人を民族家族の一員として迎え入れる課題が象徴されていた。

この記事にも、大々的かつ組織的にクリスマス小包が準備される様子が描写されている。受取人である、暗く寒い北方の空軍基地で孤独な見張りにつく兵士、東部や西部で他民族に囲まれている兵士、あるいは海上でクリスマスを迎える兵士たちに、民族全体が名も知らぬ彼らのことを考え、その犠牲的行為に対する銃後の感謝を知ってもらわなければならないとしている。この記事を読むと、兵士が受け取った小包に詰められていた品を具体的に知ることができる。(図2)

女性たちは、毛糸で暖かいものを編み、クリスマスの挨拶を添える。女子青年団員や子ども団員は自分で書いた詩を入れる。(図3) それぞれの故郷のレシピによる大量のクリスマス・クッキーが焼かれる。本棚から寄付された書籍や雑誌、それに、女子青年団員が美しい本カバーや葉を手作りする。小銭入れ、メモ帳、煙草入れ、写真帳、子ども団がダンボールや革の端で作ったゲーム。オーストリアのケルンテンでは、女子青年団が美しいデザイン文字で心を込めてケルンテンの諺をカードに書いて、プレゼントに添える。ドイツ中部のある都市では、ナチ女性団のカメラ担当者が、出征兵士の妻子を撮影し、父親を喜ばせるために軍事郵便小包に写真を忍ばせる。そして、故国のシンボルである香りを放つモミの枝を入れる。重要なことは、プレゼントの実質的な価値より、プレゼントを考



図2 「女子青年団員たちによって前線に送る小包が心を込めて詰められる」
(出典：『女性展望』1940年12月第2号、190ページ)

図3 「ナチ女性団の子ども団員たちは大忙し。手紙を書くのは大変な仕事だけど、兵隊さんのためなら難しすぎることもなんて何もない」
(出典：同上)



図4 「野戦病院の負傷兵たちを訪ねる子ども団」
(出典：『女性展望』1941年12月第1号、163ページ)

え出し作成する精神的参画や愛情であり、プレゼントを受け取った兵士たちにその絆を感じてもらったことであった。

この時期の特徴は、兵士よりももっと愛情を込めて対応すべき対象として戦傷兵が挙げられている点である。「兵士のお母さんたち」が野戦病院へロウソク、モミの枝、プレゼントの小包、薫り高いクッキーを運び、屋外で女子青年団がクリスマスの歌を歌う。子ども団の子どもたちとの楽しい会話で、兵士たちが暗い思い出を忘れ、心の平穏を取り戻せるようにするのが目的だった。(図4)

そのほかに力を入れたのは、ベッサラビア、ブーヘンラント、ドブルージャから故郷に戻ってきた民族上のドイツ人たちのキャンプへクリスマス小包を送ること、そしてヴァルテラントやポーランド総督府の子どもたちに手作りのおもちゃを届けることだった。「一人ひとりがドイツという大きな民族家族に加わり、そして誰一人忘れられたりはしない」がスローガンだった。

戦時冬期救援事業は1942年/43年度まで続き、寄付総額は毎年ほぼ3億マルクずつ大幅に増加していく。しかし1941年6月22日に独ソ戦が始まると、戦時の冬期救援事業の在り方も変化する。開戦直後は勝利を重ねて66万人のソ連兵を捕虜にするが、冬の訪れと共に戦況は徐々に悪化する。ポーランド侵攻以降の連戦連勝に陰りが見られる時期である。

それまでは、銃後の女性たちが大規模に前線の兵士たちを支援し、大ドイツに帰郷した民族上のドイツ人たちを援助することは、公的には民族共同体の構成員である女性たちにとって、総統が指示する共同体の一体化と強化への貢献であり、他方では、戦場で戦う家族に対する憂慮を過重な活動によって押し殺す精神安定剤の機能もあっただろう。戦争前半期の『女性展望』の記事は、ナチ女性団、ドイツ女性事業団、そして女子青年団や子ども団が行った多岐にわたる冬期救援事業の活動報告が主体となっている。それらは、まだ十分には共同体の活動に参画していない読者を引き込む宣伝の役割を果たし、同時に全国女性指導者ショルツ＝クリンクとその指導の下で活動する女性組織にとっては大いに自負できる功績の記録だった。

それが、独ソ戦開戦の年の冬以降、戦死者や負傷兵が急増し、それに対応するための迅速で大規模な追加徴兵が繰り返されるようになる。若い女性たちも、開戦初期は農村奉仕が戦時活動の柱だったが、独ソ戦が始まると国防軍へも動員され始めた。⁶⁾こうした不穏な戦争遂行に加え、日常生活も物不足に苦しめられるようになる。⁷⁾1942年春頃からは、イギリス・アメリカ空軍のドイツ本土空爆も本格化する。すなわち、銃後はもはや「銃後」ではなくなり、前線と化すことになったのである。

こうした状況のなかで、『女性展望』に掲載される戦時冬期救援事業の記事は、銃後から前線や東部占領地区へクリスマス小包を送送するという一方向的活動報告だけでは済まなくなる。これまでの活動は継続されるものの、女性たちが強靱な心を持って揺らぐことなくナチ体制に従えるように、誌上で前線の兵士たちとコミュニケーションを図る双方向的記事を増加させ、女性たちの心を励ましながら最後まで共同体を支える行動に導こうとしている。このことについては、次項で考察したい。

2. 銃後の団結を促す戦時のクリスマス・プロパガンダ

最初の戦時のクリスマスは、1939年のクリスマスということになるが、開戦後数ヶ月の時期にはまだ「戦時のクリスマス」の名称は登場していない。家族が戦争に赴き、配給制度が導入され、日常生活は緊張に充ちていたはずだが、電撃戦により短期間でポーランドを制圧できたこともあり、戦時といえどもまだ楽観的な雰囲気があった。

1940年に「戦時のクリスマス」という表現が使われるのは、全国女性指導者ショルツ＝クリンクのクリスマスの挨拶においてである。⁸⁾そのなかで読者に向けて、女性のあるべき姿勢として3点を挙げている。1点目は、夫や息子を戦場に送り出した母たちの思いを共感し(図5、6)、共にクリスマスを過ごすよう心がけること、2点目は、100年にわたりドイツから分離していた民族上のドイツ人が東から、南東から帰国するが、他民族のなかで息子や娘たちをドイツ人として育てるために奮闘した母たちを歓迎すること、そして3

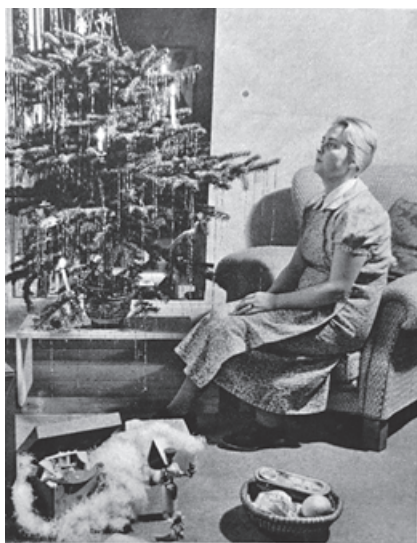


図5 一人のクリスマス
(出典：『女性展望』1939年12月第2号、275ページ)



図6 「クリスマスのロウソクの灯りのなかで」
(出典：『女性展望』1940年12月第2号、186ページ)

点目は、戦時活動と家庭の二重負担を引き受け、家庭においては子どもたちのために父と母の両方の役割を果たすことだった。

ショルツ＝クリンクは1941年の戦時のクリスマスにも読者に挨拶を送っている。⁹⁾ここでは、行政区分である支部、細胞、班の女性指導者たちやドイツ労働戦線女性局の女性管理者たち、工場で就労する女性たち、そして民族上のドイツ人のキャンプで活動するボランティア女性たちに感謝の言葉を送っている。新年を迎えても仕事量や内容は軽くなることはないという見通しを語っている。そこからは、戦時活動がフル回転していることが察せられるが、これまでは、冬期救援事業であれ戦時冬期救援事業であれ、女性組織の精力的な活動報告ばかりが目立っていた。もちろん、それによって自己評価を高め、『女性展望』の読者に対してさらなる参画を求める意図はあったが、前線への大規模な援助に対する兵士からの感謝については、報告のほんの一部を占めるに過ぎず、銃後と前線の双方向的記事は稀だった。

ショルツ＝クリンクの挨拶が載った1941年のクリスマス号は、その年の6月22日にドイツ軍の華々しい連勝で始まった独ソ戦に陰りが見える時期にあたる。その号の表紙は「戦時のクリスマス」のキャプションが付された国防軍のクリスマスを暗示している。(図7)



図7 「戦時のクリスマス」
(出典：『女性展望』1941年12月第1号、表紙)

これ以降、銃後活動の一方的な報告だけでなく、前線からの報告、銃後の支援に対する感謝や励まし、そして絆の確認の手紙など相互の極めて感情的なつながりが濃厚になっていく。しかし、そのコミュニケーションが心のこもったものになればなるほど、破滅へのプロセスも次第に明らかになっていった。

(1) 軍事郵便の状況

そもそも軍事郵便を利用した前線と銃後の個人的文通や銃後から前線への、特にクリスマス小包の発送は推奨された。兵士の不屈の源は、ドイツ民族固有のクリスマスに受け取るクリスマス郵便であり、クリスマス小包だと考えられたからである。それゆえ、ドイツ国営郵便は軍事郵便を優先し、政府も迅速な銃後からの郵便物の送付によって、とりわけ感情が高まるクリスマスの日々に兵士たちのモラルの強化と支援を目指した。銃後の家庭を守る女性たちにとっても、前線から届く手紙が最も素晴らしいクリスマス・プレゼントだった。

兵士と銃後の間に濃密なコミュニケーションがあったことは、大戦中に300～400億通以上の手紙が軍事郵便で交わされたというデータが証明している。¹⁰⁾『女性展望』もアドヴェント中に、前線の家族に手紙を書くことを勧めている。小さな喜び、大きな喜びを手紙に書くことはいいし、ちょっとした心配事は障りないが、敵と対峙している兵士たちに心労を与えるような大きな心配事は書くべきではないと、手紙の書き方について細かな注意を与えている。¹¹⁾

クリスマス小包については、期日までに小包が前線の受取人に届くよう、国営郵便はク

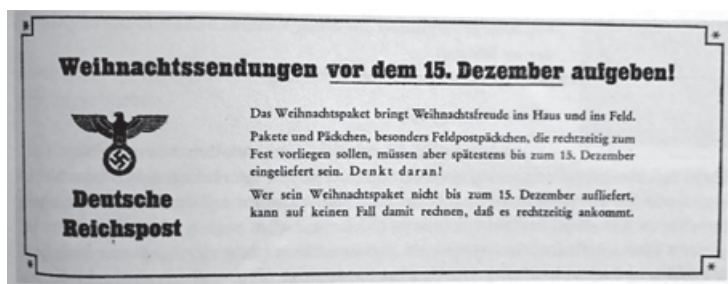


図8
「クリスマス郵便物は12月15日までにしてください！クリスマス小包は、家庭と戦場にクリスマスの喜びをもたらします。クリスマスに遅れずに届けて欲しい小包、特に軍事郵便小包は、遅くとも12月15日までに送さなくてはなりません。ご注意ください！12月15日まで

にクリスマス小包を窓口に出さない方は、小包が期日までに到着することを期待できません。 [ドイツ国営郵便] (出典：Christina Deutschbein und Nils Korsten: *Heilige Nacht? Das Weihnachtsfest im Dienste der NS-Propaganda. Materialien & Studien zur Alltagsgeschichte und Volkskultur Niedersachsens*, Cloppenburg, 2007, S. 97)

クリスマス小包の持ち込みについて注意書を発表している。(図8) ナチ女性団は、家族からのクリスマス小包を受け取れない兵士が戦場で孤独を感じないように、戦時冬期救済事業のクリスマス小包発送の仕事を大掛かりに展開した。「誰一人忘れられていない。誰一人取り残されない」をモットーとして。

戦争前半期においては、コミュニケーションは円滑に図られたが、戦局が変化する1942年以降は、前線の兵士たちから、故国の家族とのコミュニケーションが分断されたとの報告が増加する。補給状態も壊滅的になった時期には、手紙や小包の到着が遅れたり、全く届かなくなる。すでに空爆の被害を受けていた故国の家族に対する心配が高じて、アドヴェントの時期の家族とのコミュニケーションの欠如は、戦闘部隊の士気を阻喪させることにつながった。¹²⁾

(2) ナチ女性団・ドイツ女性事業団の活動報告から、誌上における前線と銃後とのコミュニケーションの重視へー前線報告、前線からの手紙

a. 母から前線の息子への手紙

『女性展望』の誌上でも、銃後と前線の兵士とのやり取りは、戦時のクリスマスが意識されるようになると、次第に頻度が増している。

1941年12月第1号に、戦場にいる18歳の息子に宛てたある母親の手紙が掲載されている。¹³⁾ (図9、10) 息子が子どものころから使ってきたクリスマス飾りや人形を取り出してクリスマスの準備に取り掛かりながら、今クリスマスを待つ喜びを感じることに罪悪感を抱いている。というのは、息子たち兵士が今この時にも、寒さに震え、泥だらけでクリスマスを迎えなくてはならないかもしれず、傍らでは戦友が死に直面し、あるいは苦痛のために母や妻を必要としているかもしれないと想像するからである。この手紙は、ほかの姉妹や弟の手紙や手作りのプレゼントと一緒にクリスマスに届くはずになっている。手



図9 「息子の写真」
(出典：『ナチ女性展望』1941年12月第1号、161ページ)



図10 「母への手紙」
(出典：同上)

この2枚の写真はセットで
記事「息子に宛てた母の手
紙」に添えられた。

紙には息子たち兵士への感謝が続く。彼らが見張りをしてくれるから、銃後は安心して眠ることができる。戦場に雨が降っている時、母親家族は屋根の下にいる。夜間、防空壕で過ごす時も、兵士たちは昼夜を問わず軍務に就いている。だから、クリスマスが来たら、どの家でも最初のロウソクは戦う民族共同体の兵士への感謝と祈りのために灯し、次のロウソクは戦死しても永遠に私たちのなかで生き続ける兵士のために灯すと書いている。そして手紙は、「しっかり耐えて、私たちみんなのために、あなたの母のために勇敢に闘ってください」と結ばれている。

この手紙を書いた母親の夫は若くして第一次世界大戦に出征し、敗戦後はナチ運動に身を投じて突撃隊員として亡くなったことになっている。彼女は、女手一つで子どもたちを育て上げ、今、長男を戦場に送っている。ナチ運動で死亡したかは別として、第一次世界大戦時に夫が戦死し、その後この母親のように一人で子どもを育てながら、今度は息子を戦争に送り出した女性たちは多かった。

この手紙は、言うまでもなく創作である。公開されることが意図されており、『女性展望』が提案した前線への手紙の書き方に沿っている。戦場の家族に感謝し、あれこれ心配し、家族みんなが出征した兵士への心からの愛の証に、クリスマスに遅れることなく届くプレゼントを用意している。この時期、空爆はまだ本格化していなかったが、戦場にいる兵士に余計な精神的負担をかけないように、防空壕で過ごすことは、さりと触れている。そして、極めつきは、結びの文であろう。結局、民族共同体のために勇敢に闘うことを期待している。それも、命を賭して闘うのは「あなたの母のため」と母親自身が息子に迫っている。

前線へ送る手紙の手本として掲載されているこの手紙が、母親から息子に宛てたことにも、象徴的意味がある。「母国」は、自分の生まれ育った国を意味するのであるから、手紙に見られるパーソナルで細やかな心情の母と息子の関係の背後には、国家が国家のために闘う戦士に求める愛国心が透けて見えるのである。

b. 銃後を安心させる前線報告

銃後からの手紙の応答として、同じ1941年12月第1号に宣伝中隊の従軍記者4人による極地の夜のクリスマス、フランスの掃海艇でのクリスマス、航空機修理工場のクリスマス、イギリスの島でのクリスマスの報告が並んでいる。ただ、1941年のクリスマス号に掲載されているものは、前年の体験報告なので、まだゆったりとクリスマスを祝っている印象を受ける。翌年の従軍記者の報告内容と比較するために、40年の前線でのクリスマスについても読んでおきたい。4つのなかから「極夜のクリスマスツリー」と「掃海艇のクリスマス」を見てみよう。

「極夜のクリスマスツリー」¹⁴⁾では、ノルウェーに向かう4隻のクリスマス船をキルケネス港で山岳兵、水兵、パイロットが手を振って迎える。船首に巨大なクリスマスツリーが設置され、極夜の闇のなかで点灯するツリーの光で船が幽霊船のようにみえる。船はハンプルク・ニューヨーク間の半分の距離を、兵士たちにクリスマスの喜びをもたらすために危険な航海をしてきた。それゆえ「クリスマスおめでとう！」の横断幕を下げた船は、兵士たちにとって「幸せを運ぶ船」だった。ドルトムント・ビールやミュンヘン・ビールの樽を届けてくれた。楽器の箱にはツィターが入っていて、次の日のパーティで、オストマルクとバイエルンの山岳兵中隊による演奏が披露された。司令官は、大尉と軍曹の間に座って、黙って音楽に耳を傾け、それが終わると、美味しいものやアルコールのプレゼントが配られた。極地においても、誰一人忘れられていない、という気持ちを強くしたとレポートされている。

一方「掃海艇のクリスマス」¹⁵⁾では、「クリスマス委員会」というものがあって、暇を見つけてはフランスの古い漁船を掃海艇に作り直し、狭いながらも船内をクリスマスの祝祭の会場とした。船内には会食テーブルがあり、中央にはクリスマスツリーが立っている。テーブルの上席には隊長が着席し、その壁にはハーケンクロイツ旗と軍艦旗の間に、緑の枝で飾られた総統の写真が掛かっている。白い布が敷かれたテーブルの食器にはケーキや果物が盛られ、モミの枝も置かれている。モミの枝は、壁やロッカーのドア、ベッドの木枠にも括りつけられ、クリスマスの香りを放っている。別のテーブルには金銀のひもで結ばれたプレゼント小包が山のように積み重ねられている。

隊長が戦果のスピーチをし、戦死者を追悼し終わると、隊長がプレゼントを配った。家

族から、司令部から、そしてあらゆる大管区からの心のこもったプレゼントである。見張りを交代しながら、小包を開けてプレゼントを確認し、カードや手紙を読む。それから、古くからのクリスマスの歌をみんなで歌い、おしゃべりの時間を楽しんだ、とある。

こうした従軍記者の報告は、第一次世界大戦時のクリスマス表象と全く同じだった。すなわち、銃後の女性たちを安心させることが記事の目的だった。待つ喜びや、クリスマスのために飾り付けをした家々やクリスマス市の体験はできないが、兵士たちは協力してクリスマスツリーを立て、モミの枝を飾り付け、美味しい食べ物と飲み物に不自由せず、歌や音楽でクリスマスを祝い、銃後からのプレゼントを受け取って愛する人々に思いを馳せながら、戦友たちという大家族のなかで一人きりではないと感じている。これを読めば、戦争の現実を正常化し受容できるような気持になる。軍服の兵士たちは兵舎で、あるいはみんなで集まって「大家族」のなかで不安を抱かずクリスマスを祝っているのだから。

翌年の1942年12月号にも「極夜の冬至」、「寒さと死にも負けずクリスマスは祝われる—コーカサスのクリスマスの祝祭」と「私たちは心のなかで君たちのところへ行くともりだ—愛する女性たちに宛てた軍事郵便の手紙」の、従軍記者による3つのクリスマス記事が掲載されている。

「極夜の冬至」¹⁶⁾は前年の「極夜のクリスマスツリー」とレポートされる場所は同じだが、兵士たちが体験するクリスマスには全く触れられていない。闇と氷と雪と岩の北極圏で、12月21日の冬至の日に日中の時間帯に闇夜にわずかばかりの太陽の光を目撃する奇跡を描写している。その冷たく透き通った冬至の日に、一機の戦闘機が轟音を立てて飛び立っていく。その腹部が弱々しい太陽の光を受けて輝いている。光を受けて高みへと飛んでいく孤独なパイロットに永遠の憧れを投影させる極夜の世界の描写は、戦争の現実からはほど遠い美的情景でしかない。

昨年の記事に書かれていた本国からのクリスマス貨物船がこの年にも北極圏に寄港したのか気になるところだが、コーカサスにはクリスマス小包が届いており、慈善小包を用意した女性たちの努力に感謝が述べられている。(図11、12)クリスマスのお祝いも兵士たちによって準備されたが、昨年の準備係は戦死したという事実も隠すことなく伝えられている。すでに戦死者が多数出ていることは隠しおおせない事実だったからだろう。この報告記事によると、兵士一人ひとりにフランス産シャンペン、コニャック、ギリシャ・タバコ、デンマークのクッキーが配られたとあるから、兵士への配給には配慮があったことが窺える。そして、子どもたちのためにクリスマスツリーを飾り、家族とまた一緒にクリスマスを祝うには、今戦っているソ連のボルシェヴィズムを打倒するほかないのだと、コーカサスであれ太平洋岸であれ軍務に就く何百万の兵士たちは戦場のクリスマスで同じことを考えている、と報告されている。¹⁷⁾ ここには、家族と祝うクリスマスの平和は、その平

和を脅かす敵に勝利しない限り実現できないという課題を兵士に突きつけ、戦闘継続の正当化にクリスマスが利用されている。



図12
「仮の宿舎や分隊のためのこの小さな木は、ロウソクの光とたくさんの思い出とともに、故郷を目の前に再現してくれる」
(出典：同上)

図11
「一人ひとりが、故郷からの心のこもったプレゼント小包を受け取る」
(出典：『女性展望』1942年12月号、120ページ)



c. 従軍記者の手紙にみられる内容の変化—クリスマスの祝祭における戦死者追悼、戦争目的の変更

報告型記事とは全く異なる印象を与えるのが、書簡形式で書かれている「私たちは心のなかで君たちのところへ行くつもりだ—愛する女性たちに宛てた軍事郵便の手紙」である。続けて掲載された3つの従軍記者による記事のなかでは特別に長く、前線報告の先頭に置かれている。その東部戦線で書かれた長い手紙から一部分を引用してみよう。

(…) いつもだったら2人の子どもたちのためにプレゼントを配るサンタクロース役を演じ、「きよしこの夜」を歌う時には、君たちより1オクターブ低い素敵で低音で歌う人は今回もない。今回も君たち女性たち、母たち、そして子どもたちだけがツリーの周りに集まるだろう。息子たち、父がいないのは、2度目、3度目、もう4度目だ。(…) 私たちだって君たちのクリスマスの輪のなかに入りたくて、どんなに願っていることか。「心のなかで君たちと一緒にいるからね」と書かれた何百万通の軍事郵便が何千マイルの距離を行き来していることがその証拠だ。

1通1通の手紙の内容は分からなくても、ちょっと違うことは知っている。仲間の軍人手帳、札入れ、身分証明書に少なくとも1枚の写真も入っていないものはない。何千

回も取り出し、何千回も周囲の者に見せ、何千回も愛されたよれよれの写真。(…) 君たち女性は家にいて、遠く離れた中隊で君たちがどんなに有名人なのか、いつもみんなの会話の中心で、いつもみんなの思い出の終着点で、憧れの源であって、君たちは昼夜を問わず、君たちの夫や息子のそばで生き生きと、まるでそこにいるかのようなことを想像できないだろう。手紙のなかで、どんなに請け合い、断言し誓っても伝えることのできない事実なんだ。

今回もまた…今回もまた、私たちにはクリスマス・テーブルの準備ができず、プレゼントは一つも君たちの所に届かない。夏であれば、秘かなキスのように少なくとも花を手紙に添えることができるが、東部や北部の真っ白な荒野では私たちの愛を託す花を摘むこともできない。私たちのカバンやわずかな軍用荷物にはプレゼントになるものは何一つない。少なくとも、パパがなぜ今こんなに「貧乏」なのか理解できない小さな子どもには、ほんの少しの美味しいものやおもちゃを届けたいとどんなに思うことか。でも、それすらできない。私たちが愛情のない父親なんかじゃないことを示すには、もう少し時間がかかる。(…) 君たちが安心して暖かい部屋にいられることを、目下の私たちのプレゼントとして受け取ってほしい。ロウソクが輝き、聖なる夜を祝えるよう、君たちの夫と父は武器を持って屋外に立っている。君たちがベッドで安心して眠れるように、君たちから遠く離れているんだ。そして、いつかずっと君たちの所へ戻れるようになったら、仲間みんなと一緒に、男として届けることのできる最も素晴らしい最大のクリスマス・プレゼントを届けよう。それは、君たち一人ひとりにとって、輝く未来を約束する豊かで大きな平和の確かさだ。

(…) 私たちが、もう二度と再びクリスマスを妻や母、子どもたちと家で過ごすことのできない、わが国の戦死者たちのことを考えたら、今回もまた会えないことはどれほどのことだろう。クリスマスに心の痛みを感じるとすれば、それは生きている者同士の別離ではなく、道端の十字架の下に横たわる人々と、彼らが家に残した女性たちのことを考えるときの心の痛みだ。彼らの苦しみに比べれば、他方の苦しみは存立しない。その苦しみに比べれば、私たちの苦しみは自らの慈悲深い運命に対する感謝の念に姿を変えるだろう。

だから、私たち灰色の制服を着た戦場の男たちが、すべての前線からクリスマスイブに心のなかで君たちの部屋へ行き、愛する君たちの髪をなぜたら、次は、同じく心の中で、孤独な夜に、戦死した仲間の妻や母たちが座る部屋へ行き、運命が彼らから犠牲を要求し、私たち民族の存続のために抗うことなく与えたものに対して、畏敬の念をもって頭を垂れよう。

来る年も、前年同様に私たちにとって愛する母のような同伴者であり続けて欲しい。私たちは、君たちをこの上なく愛し、君たちの生命、誠実さ、名誉を昼も夜も身体を張っ

て守っているのだから。¹⁸⁾

手紙の形式を使っているため、2人称での呼びかけは直接感情に訴える力を持っている。テーマは戦争で遠く分かれて生活しなければならない家族の愛と絆である。それも、普段知ることのできない戦場の兵士たちの心が伝えられている。いや兵士なのではなく、夫であり父の側からの細やかな愛情が描き出されている。この中隊にも、クリスマス小包や慈善小包が届けられているはずだが、ここでは愛の代替である「モノ」に重きは置かれていない。組織的に大規模に準備される戦時冬期救援事業のクリスマス小包は、たしかに「誰一人忘れられる人はいない」をモットーに「愛情を込めて」行われると言われるが、民族共同体による大車輪で進められる機械的な作業ではなく、ここでは親密な家族のつながりが大切にされている。

なぜ家族と一緒に暮らせず、夫や父は命の危険を冒さなければならないのか。ここでは政治的根拠、たとえばボルシェヴィズムは戦うべき敵として言及されていない。戦うのは、愛する家族を守ることだけに集約されている。一步間違えば、反戦記事になりかねない「手紙」だが、もちろん検閲を通過して『女性展望』に掲載されている。そのことを考えると、戦争4年目においてこうしたパーソナルな愛情を記述する記事が載せられた背景には、銃後の女性たちが陥っていた不安定な精神状態があったことを推測させる。

手紙の最終部は、戦死した兵士たちと残されたその家族に当てられている。戦争の残酷や悲惨はもちろん書くことは許されない。それに代えて、国家のために命を捧げた兵士たちへの畏敬の念と、その家族に対する深い同情を描き、戦争の酷薄を静かに訴えているようにみえる。(図 13)



図13 「1943年の冬至」

右側には東部戦線で戦死者を悼むクリスマスが描かれ、左には父も揃って祝う本来の家族のクリスマスが理想像のように並置されている。1943年のクリスマスに、大きなツリーにロウソクを灯して平穏なクリスマスを祝うことができた家庭は、どれだけあったろうか。

(出典：『女性展望』1943年12月号、表紙)

宣伝中隊従軍記者ハンス・フツッキー¹⁹⁾のこの記事のように、戦死者について立ち入る記述はこれまでになかった。しかし、1942年の戦時のクリスマスからは戦死者と結びつけてクリスマスを考える姿勢が『女性展望』にはっきり見られる。3人の従軍記者による記事が載った同じ号の巻頭に、第2代ナチ女性団指導者だったリュディア・ガンツァー＝ゴチェブスキーが「1942年の戦時のクリスマス」²⁰⁾を執筆している。

そのなかで彼女は、クリスマスを「聖なる死の祝祭」と呼び、死が生命の終わりを意味するわけでないことを力説している。終わりとは、犠牲的行為が忘れられ、無意味であるという烙印をおされる時であるとし、戦死者は民族のなかで生き続けるという精神論を展開している。(図14)フツッキーの戦死者への畏敬にも見られたように、クリスマスはもはや、幼子イエスの誕生とはかけ離れ、戦没者慰霊の色彩が濃厚になる。

1942年のクリスマスから、戦没者慰霊の色彩が濃くなる切っ掛けは、国民啓蒙・宣伝大臣ゲッベルスのクリスマス・スピーチであった。国防軍精鋭部隊の第6軍は、その年のクリスマス前に孤立状態にあったスターリングラードから脱出することができず、このことは、部隊の壊滅を意味した。包囲された19万5千人の兵士の内16万5千人が戦闘ないしその後の捕虜収容所で死んでいる。ゲッベルスは1942年のクリスマスの破滅的な事実直面して、戦死者たちは「男として英雄として祖国の息子が体験できるなかで最も誇り高く勇敢な生涯を送り、英雄的な最期を終えることができるだろう。彼らは、私たちが光のなかにいられるように、自らを犠牲にしたのである」と激烈な調子で語り、民族共同体のために犠牲死を遂げた戦士たちを称え、無駄になる死はないことを強調して、とりわけ母親たちを慰め励まし、国民のさらなる闘いと犠牲を要求したのだった。²¹⁾

クリスマスに戦死者追悼の行動をとらせる背景には、戦死者の急激な増加によって厭戦気分が高まり、人々が信仰へ逃避することがないようにするためだった。1942年から44年までに出版されたクリスマス本にはどれにも、ティーロ・シェラーの詩「戦死した兵士たちの帰宅」が掲載された。クリスマスツリーに赤いロウソクが灯されるのを合図に、戦



図14
「ミュンヘン戦没者記念碑のクリスマスの夜。わが国の戦死者は、誓を立てた彼らの偉大なる犠牲と、私たちの心の力によって不滅であり続ける」
(出典：『女性展望』1942年12月号、118ページ)

死した家族が、クリスマスの夜に短い訪問をするという内容だった。そして、亡くなった人が同席している気持ちになれるよう、写真をクリスマスツリーの下の主賓席に置くことが提案された。²²⁾ 墓地に小さなモミの木を添えるクリスマスの習慣は、現在でも南ドイツに残っている。

『女性展望』には、英霊の永遠性という抽象的な戦没者追悼を説明するガンツァー＝ゴチェブスキーの記事を除いて、戦死者追悼のクリスマス記事は見つからないし、シェラーの詩も見当たらない。それは、発行部数第2位だった『主婦の雑誌』も同じである。すでに本土への空爆が激しさを増すなかで、安全に穏やかなクリスマスを家庭で祝うことそのものが無理な話だった。

東部戦線で明らかになった軍事状況の変化と共に、戦争への疑問は増大した。兵士の戦時モラルを維持するために、1942年からプロパガンダは別の戦争目的を打ち出すことを余儀なくされた。開戦当初の東部の「生存圏」獲得の代わりに、残虐非道な敵の攻撃から故国を防衛し、家族を保護することが戦争の大義に据えられた。クリスマスそのものさえ、守るべき財産と位置付けられていった。

このように、『女性展望』の読者に宛てられたフツッキーの公開状には、当時の変更された方針が込められていたことになる。

(3) 戦争末期—義務、諦念、そして信仰

シヨルツ＝クリンクは、1943年12月号の「1943年の戦時のクリスマス」²³⁾のなかで、5年目を迎えた戦時下の女性たちを、何人もの息子たちを前線に送り、自らは重労働を引き受ける母として、例外なく子だくさんで、戦場で戦う男性に代わって農作業に従事する母として、党や女性組織で働く主婦に加えて、空爆の被災者支援に動員される女性の姿として描いている。そうした厳しい現実のなかでも、全国女性指導者は、家庭のなかの「母」としてだけでなく、「民族の母」という意識をもって、前線の兵士と一体となって、絶対的平和を手に入れるために働き闘わなければならないと激励している。働き闘う義務は、何百年にもわたって故国を守ってきた祖先に対して、世界大戦においてボルシェヴィズムとの戦いで外国に眠る人々や国内の空爆で亡くなった人々に対して、そして祖先から血を引き継ぐ将来のひびとに対する義務であると力説する。そして、どのように働き、戦うのか、その目標を決めるのはヒトラーだけであると締めくくった。

イギリス・アメリカ空軍によるドイツ本土への空爆が本格化するのは1942年春頃だったが、スターリングラードの敗北以降、弱体化したドイツへの空爆は激しさを増し、ハンブルク市街を壊滅させ5万人の死者を出した無差別爆撃は43年の7月下旬から8月上旬にかけてのことだった。『女性展望』に空爆の記事が載るのは、1943年5月号（「防空に

において女性たちが働けること」「焼夷弾に対する効果的な闘い」)以降で、9月号では、激しさを増す空爆に怒りを表す「アングロ・アメリカの悪党空軍—20世紀の文明破壊者たち」や、空爆に挫けず、被災者支援を報告する「10万人が満腹になれた—模範的な女性動員」、11月号には「航空戦のテロルに対して闘う女性たち」、1944年1月号には「空襲の危機に対して家庭で絶対に欠かすことができない備え」や「首都を襲うテロル」といった記事が続き、空襲への怒り、備え、互助態勢、生きる意志を訴えている。銃後のはずが、生死を分ける危険に脅かされる生活を強いられる戦争の段階に入っていた。

しかし、そうした絶望的な日常にもかかわらず、戦争を遂行する国家のために働き闘い続ける義務の根拠や「目標を決めるのはヒトラーだけ」というショルツ＝クリンクの言葉は、戦争がもはや「後戻りできぬ運命」であることを女性たちに突き付けることになった。

1943年のクリスマスに発表されたショルツ＝クリンクの言葉に、記事「5回目の戦時のクリスマスをめぐる兵士の考え」²⁴⁾が続く。前年のクリスマスに従軍記者が前線の兵士たちの様子を伝える内容とは異なり、全国女性指導者の言葉を補完するように、爆撃を受けて被災する故国の女性たちの気持ちが折れないように思いやり、励ます目的で、苦しい戦争を戦う兵士自身が書いた記事である。

予期せぬ戦争の長期化に、まず失望を表明している。開戦1年目は家庭にも前線にも豊かさがあつたが、今では、どちらにも困窮が広がっている。愛する人々はヨーロッパ、アジア、アフリカで戦い、大ドイツのいたるところで、労働者、農民、市民の家々は空爆で破壊されてしまった。勝ちもしたが、打撃も多かったと振り返る。しかし、5年目の戦時のクリスマスで認識できたことは、クリスマスには兵士たちが心のなかで別れ別れの家族のもとにいて、自分たちが「一つの民族」だという価値観がむしろ確固たるものになった。各家庭でクリスマスツリーに1本のロウソクも灯せなくなり、共同体でクリスマスを祝うことになったとしても、それは耐えられぬことではなく、むしろ戦争という困難から共同体という美德、この時代の「財産」を見出したと強調する。共同体への帰属意識は、自分たちの力であり、生きる肯定感の源であるという根拠を挙げている。結論は、1943年のクリスマスが戦時下で最後のクリスマスになるかは分からなくとも、自由と平和のクリスマスが実現されるまで自分たちの義務を果たすしかない、と結んでいる。

ナチ指導部は、第一次世界大戦のように銃後が崩れることを最大の脅威と捉えていたので、この記事においても、民族共同体への強い帰属意識を持って闘い続けることが、現況において、前線の兵士を助け、そして、苦しい状況に置かれる女性自身の精神的支えとなるという結論に達している。それにしても、『女性展望』が官製雑誌として、堅固な銃後を鼓舞することが使命であったことを考えると、この記事には故国の女性たちが被っている厳しい現実が包み隠さず記述されていて驚く。現実を無視して奮い立たせるだけでは、

目的は達成できず、読者である女性たちの現状に理解と共感を示して初めて、説得力ある訴えにつながると判断したからだろう。

1942年のコーカサスからの前線報告では、クリスマスの慈善小包は届いていたようだが、1943年以降になると、家庭向けにクリスマス小包用のクッキーのレシピや小さな手作りプレゼントのアイデアは見られるものの、開戦後の数年間に見られた、ナチ女性団・ドイツ女性事業団、ドイツ女子青年団などの大規模で情熱を傾けた寄付の品物の回収や募金、クリスマス小包の作製、クリスマス会の開催に関する報告記事はなくなった。掲載されているのは、野戦病院でクリスマスを迎える兵士たちを慰め喜びを与える活動についての記事だけである。

1943年12月号に載る「看護師イルゼとのクリスマスの夕べ」²⁵⁾は、クリスマスの日の野戦病院の様子を描写している。病院のツリーは美しく飾り付けられている。(図15) 家族と帰宅できる患者、クリスマス休暇を取得できる人は一時退院した。家族とクリスマスを過ごしたい看護師も帰宅し、夜勤を申し出たイルゼだけが病院に残っている。彼女の夫はアフリカ戦線で戦死し、娘はオーバーバイエルンに疎開しているので—この号には学童疎開の記事も掲載されている—、クリスマスを一緒に過ごす家族はいなかったからだ。イルゼは、東部戦線でツリーもロウソクの灯りもなく戦闘に明け暮れたクリスマスを思い出す兵士の話に耳を傾け、深い孤独感に苛まれて涙を流し続ける19歳の少年を慰め、野戦病院に残る兵士たちを見守る。

イルゼは、夫の戦死という辛い運命や子どもと別れて暮らす孤独に打ちひしがれることなく、ショルツ＝クリンクが求める「民族の母」として働き闘う理想の女性として描かれている。看護師でなくとも、国家のために闘い傷ついた兵士たちに優しさを示し喜びを与えることはクリスマスの時期には欠かせなかった。野戦病院訪問の奉仕活動は、戦争が長引くにつれ、ますます重要になった。(図16、17)

1944年12月号でも記事「1944年のクリスマス」²⁶⁾のなかで、大勢の兵士を代表して



図15

「兵士たちは看護師たちのクリスマスの準備を進んで手伝う」
記事「看護師イルゼとのクリスマスの夕べ」に添えられた写真

(出典：『女性展望』1943年12月号、44ページ)

図16

「自分で作った小さなプレゼントを持って野戦病院にやって来た、ナチ女性団の子ども団員たちの喜びは、負傷兵と同じくらい大きい」
(出典：同上)



図17

「ナチ女性団の女子青年団員たちが負傷兵たちを見舞う」
(出典：『女性展望』1944年12月号、27ページ)

一人の兵士が6回目の戦時のクリスマスに女性たちや女子青年に語りかけている。前年の兵士による記事と同様に、故国が敵の攻撃に晒され、自分たちの背後に苦しんでいる存在を感じながらも、踵を返して慰め力づけに行くことはできないと伝えている。敵を防ぐ壁となっていなければならないからである。そうした状況下でクリスマスを迎えようにも、家も財産も失い、クリスマス飾りつけも、点灯するろうソクすらない。子どもは疎開し、夫は戦場にいるというのに、誰にプレゼントを贈れるのか。今は小さなプレゼントを考え出す精神的余裕も、作る時間もない。前年の記事では、そうした戦争の困難に対して、共同体の存在が生きる肯定感の源として示されていた。しかし、ここでは、共同体についての言及は見られず、女性たちの「他者への配慮の気持ち」が豊かになったという抽象的な美徳が挙げられているだけである。

戦場で戦う兵士の覚悟については、「大統領の命令と、その命令に服すことを戦場における最善と捉え、繰り返し新しい生命が誕生することを願い、必然として生起すべきことこそ最良のものとする²⁷⁾」と述べられている。たしかに一兵卒は命令に服従し、兵士の義務に従うことは自明のことではあるが、この時期のドイツの戦況とすり合わせると、ここに表明された覚悟には、ドイツの存続を願う憧れを抱きながらも、回避できぬ運命に対する絶望と諦念が伝わってくる。

おわりに

1944年の戦況は、ドイツにとって厳しいものだった。イギリス空軍によるベルリン空爆は43年11月から44年3月まで続く。44年6月6日は連合軍がノルマンディー上陸を果たし、8月25日にはパリが解放される。東からはソ連軍が攻勢を開始し、戦線は急激に西へ後退する。年が変わり、45年の1月17日にワルシャワが、27日にはアウシュヴィッツ強制収容所が解放される。その後、連合軍が東西からドイツ本土へ侵攻し、ドイツは総崩れとなった。

記事「1944年のクリスマス」に続く、銃後における6回目の戦時のクリスマスを伝える記事「私たちの星から新たな光が私たちの朝に明るく射すまで、どんなに苦しい困難にも耐えて、あなた方の心を生き活きと保ち続けてください」²⁸⁾には、第二次世界大戦開戦から3年間にわたってみられたナチ女性団やドイツ女性事業団、ドイツ女子青年団や子ども団などのさまざまな組織による国家挙げての前線へのクリスマス小包作りや、民族団結のための「みんなのクリスマス」行事への熱狂や興奮は全く感じられない。空爆によって破壊された街でみじめな日常に生きる人々に、死者たちを追悼し、厳しい現状にもかかわらず未来に向けて希望を抱くよう励ます、静かな祈りにも似た内容である。

記事を執筆したカルラ・ドラープシュは次のように記述している。あまりにも多くの人々が家を失い無一文となり、愛する家族を失った。クリスマスツリーもロウソクの灯りもなく、子どもたちの笑い声もない。それでもクリスマスは巡ってくる。この辛い時期にもかかわらず、クリスマスを祝おうとさせるのは、祖国ドイツへの愛、ドイツ民族が生き続けることへの愛、そして、今はそばにいない夫、子どもへの愛である。どんなに激しく戦っていようとも、塹壕や防空壕にいようとも、クリスマスには、ツリーの香りとロウソクの灯り、プレゼント・テーブル、幸せそうな子どものまなざし、優しいクリスマスの歌や詩、敬虔な言葉、晴れ着を着て祝祭の食事を味わった思い出、憧れ、母の愛がよみがえる。こう語ることで、ドラープシュは、市民階級の習慣から始まった「家族の祝祭」としての理想のクリスマス像に立ち戻っている。

今、命を賭けて闘う理由は、最後の一滴の血をかけてでも守りぬくに値するドイツ精神と、自分たち自身が破滅してはならない存在であるという認識からであると、読者の自尊心と自負心に語りかける。それゆえ、眼前に広がる瓦礫と困窮のなかから、浄化され気高い最善のものが再興しなければならない。心のなかの光が燃え続け、消えずにいれば、その光は一つまた一つと広がり、やがて本当のクリスマスの光になるとして、そう信じる気持ち強くさせるために、中世後期の神学者であり哲学者のマイスター・エックハルトを引用している。「あらゆるもののなかに人は神を捉え、感情、思考そして意志のなかに常に神がおられると心に言い聞かせなければならない」²⁹⁾

クリスマスはどの人も、すなわち母、子ども、男性、前線にいる兵士たち、生き残っている者たちのために命を犠牲にした死者たち、行方知れずの人びと、捕虜となっている兵士、喪に服する人々、悲しみに暮れる人々、病と闘う人々みなを、包み込んでくれる。だからこそ犠牲となった人々に畏敬と感謝の念を捧げようと訴える。この記事でもクリスマスは死者を追悼する祝祭でもある。そして「過ぎ去るものは過ぎ去るに任せればいい。過ぎ去るのは、また戻ってくるためである。若返るために老いるのであり、別れるのは、心で一つになるためである。死ぬのは、生き続けるためである」³⁰⁾という詩を掲げている。絶望しないよう読者に語りかけることがドラープシュの意図である。孤独で悲しみに沈んでいる隣人を仲間に取り入れることは、健康で強く若い幸せな人々の義務であり、一方、孤独で悲しみに囚われている人は、苦しみを払いのける勇気を持たなければならないと結んでいる。

同号には、孤児となった子ども、あるいは妻を亡くした兵士の子ども、夫が戦死して子どもを育てられない母など、さまざまなケースの子どもたちを養子に取るか、里親になる可能性について説明する記事が併載され、実存をめぐる厳しい戦いのなかで解決を迫られる大きな社会問題を取り上げている。自分の子どもの代わりに、そうした子どもを引き受ける意志のある人は、ナチ党国民福祉団大管区課青少年支援局（養子縁組および里子制度）まで申し出て欲しいとある。³¹⁾

『女性展望』の表紙は1944年1月号からフルカラーからモノクロに変わっている。1944年12月号はナチス・ドイツ時代、最後のクリスマス号となったが、その表紙は、当時はもう期待できなかったラメッタとガラス玉が飾られ、ロウソクが灯されたクリスマスツリーの傍らに、表情は硬いながら兄妹が立つ写真である。(図18) キャプションには「闘い、



図18
「闘い、戦争そして死にもかかわらず、クリスマスは、私たちにとって愛と信じる心の祝祭であり続けてほしい」
(出典：『女性展望』1944年12月号、表紙)

戦争そして死にもかかわらず、クリスマスは、私たちにとって愛と信じる心の祝祭であり続けてほしい」とある。戦争に対する深い諦念のなかで、クリスマスはプロパガンダから解放され、冬至祭でもなく、「みんなのクリスマス」でもなく、「戦時のクリスマス」の形も崩れ、本来の家庭で祝うクリスマスの祝祭の意義に戻ったかに見える。厳しい現実のなかでのクリスマスではなく、キリスト教の愛の祝祭に根差した大きな憧れとして。

表紙には、ハンス・パウマン³²⁾の詩と楽譜が添えられている。クリスマスの歌かと思うと、そうではない。困窮に苦しむ子どもに向けた励ましの歌である。³³⁾ 苦しみは役に立つことがあるのかと問う子に向かって、苦しみは両手を強靱にし、しっかりものを見る目を育ててくれると、詩人は答える。成長したら、大きな目、苦しみを乗り越える強い両手が必要だから。凍える家、辛い仕事、そうした問いは止めよう。いつかどんな苦しみも上手に乗り越えられるようにならなくては。

『女性展望』は、次号の1944年/1945年の年越し号で廃刊となる。終戦まで、あと4か月だった。

註

- 1) 桑原ヒサ子「社会的・政治的プロパガンダに利用されるナチス・ドイツのクリスマス（上）— 冬期救援事業（WHW）と「みんなのクリスマス」の考察を中心に—」敬和学園大学『人文社会科学研究所年報』No.21、2023年、87-111ページ。
- 2) “Der Waffengang der Heimat—Das Kriegswinterhilfswerk,” 8. Jg. H. 10 (2. Novemberheft 1939), U. (=Umschlagseite) 2.
- 3) “Mutter schreibt an Vater ins Feld,” *NS Frauen Warte*, 8. Jg. H. 12 (2. Dezemberheft 1939), S. 275-276.
- 4) “Wir wollen Freude machen” (Hilde Munske), *NS Frauen Warte*, ebd., S. 276.
- 5) “Fest der Volksfamilie” (Dr. Hildegard Zimmermann), *NS Frauen Warte*, 9. Jg. H. 12 (2. Dezemberheft 1940), S. 190.
- 6) ドイツ人女性の戦時活動および国防軍との関係については、桑原ヒサ子『ナチス機関誌「女性展望」を読む 女性表象、日常生活、戦時動員』青弓社、2020年、「第9章 ドイツ人女性の戦時活動」および「第10章 ドイツ人女性兵士は存在しなかったのか」参照。
- 7) 配給切符およびナチ時代の衣食については、同書「第4章 ファッションと料理のページから再構成する第二次世界大戦下の暮らし」参照。
- 8) “Kriegsweihnacht 1940” (Gertrud Scholtz=Klink), *NS Frauen Warte*, 9. Jg. H. 12 (2. Dezemberheft 1940), S. 186.
- 9) *NS Frauen Warte*, 10. Jg. H. 11 (Dezember 1941), U. 2.
- 10) Christina Deutschbein und Nils Korsten: *Heilige Nacht? Das Weihnachtsfest im Dienste der NS-Propaganda. Materialien & Studien zur Alltagsgeschichte und Volkskultur Niedersachsens*, Cloppenburg, 2007, S. 88.
- 11) “Alltag und Feier” (Dr. Hertha Ohling), *NS Frauen Warte*, 10. Jg. H. 10 (November 1941), S. 146.
- 12) “Nationalsozialistischer Weihnachtskult,” *wikipedia* (<https://de.wikipedia.org/wiki/>

Nationalsozialistischer_Weihnachtskult) [2024年1月1日アクセス]

- 13) *NS Frauen Warte*, 10. Jg. H. 11 (Dezember 1941), S. 161.
- 14) “Lichtbaum in der Polarnacht” (Kriegsbericht A. Ruppert), ebd., S. 164.
- 15) “Weihnachten auf einem Minensuchboot” (Kriegsbericht Karl Judmaier), ebd., S. 164-165.
- 16) “Wintersonnenwende in der Polarnacht” (Kriegsbericht Dr. Horst Ost), *NS Frauen Warte*, 11. Jg. H. 9 (Dezember 1942), S. 121.
- 17) “Weihnachten wird gefeiert, der Kälte und dem Tode zum Trotz. Weihnachtsfeier im Kaukasus” (Kriegsbericht Edgar Bissinger), ebd., S. 120.
- 18) “Wir werden in Gedanken ganz bei euch sein—Feldpostbrief an unsere lieben Frauen ... im Osten” (PK. Kriegsbericht Hans Huffzky), ebd., S. 118-119.
- 19) フツキーは、1939年に女性雑誌『若い女性』（1933年創刊）の編集長に就任。40年に軍務に動員され宣伝中隊に転属された。他の前線新聞同様に国防軍最高司令部の国防宣伝部門の管轄下にあった『軍隊新聞』の編集長を42年から44年まで務めた。敗戦後まもない1947年にイギリス軍占領地区のハンブルクでコンスタンツェ出版社から創刊された女性雑誌『コンスタンツェ』の編集長となり、この雑誌を人気女性雑誌に成長させた。“Hans Huffzky,” *wikipedia* (https://de.wikipedia.org/wiki/Hans_Huffzky) [2022年10月11日アクセス]
- 20) “Kriegsweihnachten 1942” (L. Ganzer=Gottschewski), *NS Frauen Warte*, 11. Jg. H. 9 (Dezember 1942), S. 117 u. 121.
- 21) “Nationalsozialistischer Weihnachtskult,” a. a. O., 参照。
- 22) Esther Gajek: Nationalsozialistische Weihnacht. Die Ideologisierung eines Familienfestes durch Volkskundler. In: *Politische Weihnacht in Antike und Moderne zur ideologischen Durchdringung des Fests der Feste*, hrsg. v. Richard Faber und Esther Gajek, Würzburg (Verlag Königshausen & Neumann GmbH), 1997, S.203 参照。
- 23) “Kriegs-Weihnachten 1943” (Gertrud Scholtz=Klink), *NS Frauen Warte*, 12. Jg. H. 4 (Dezember 1943), S. 41- 42.
- 24) “Soldatengedanken um das 5. Kriegsweihnachten” (Jürgen Hahn=Butry), ebd., S. 42- 43.
- 25) “Ein Weihnachtsabend mit Schwester Ilse” (Regine Schütt), ebd., S. 44.
- 26) “Weihnachten 1944” (Volker), *NS Frauen Warte*, 13. Jg. H. 3 (Dezember 1944), S. 26.
- 27) Ebd.
- 28) “Haltet eurer Herzen Feuer wach durch alle schwere Not, bis von unserm Stern ein neuer Schein in unserm Morgen loht.” (Karla Drabsch), ebd., S. 27 u 30.
- 29) Ebd., S.30.
- 30) Ebd.
- 31) “Annahme an Kindes statt?” (Hanna Rees=Facilides), ebd., S. 29.
- 32) バウマンの最も有名な歌「脆いやつらは震えている」は、彼がまだカトリックの青年団体に所属していた時に作詞した。1935年にドイツ労働戦線の歌になる。ヒトラー・ユーゲントやドイツ女子青年団の数々の歌を作詞・作曲。ナチズム色のない「自由のためだけに私たちの命はある」や「明るい笛の音が響く」もあり、「きよしこの夜」に対抗するためにナチ時代に作曲された「輝く星の気高き夜」は戦後も歌いつがれた。1939年に国防軍最高司令部の依頼で『明日われわれは行進する—ドイツ兵の歌集』を出版。戦後は青少年文学作家に転向し、国際的評価を得た数々の作品が日本語を始め翻訳されている。しかし、1959年に受賞したゲーアハルト・ハウプトマン賞は、彼の過去が問題にされ1962年に剥奪された。“Hans Baumann,” *wikipedia* (https://de.wikipedia.org/wiki/Hans_Baumann) [2022年10月24日アクセス]
- 33) *NS Frauen Warte*, 13. Jg. H. 3 (Dezember1944), U. 1.